

農学はいま、持続可能な社会の実現に欠かせない実践学となっています。
ここではインタビューを通じて、農学生命科学研究科に学ぶ現役学生と、
弥生キャンパスを巣立った先輩たちのいまをご紹介します。

ON THE CAMPUS



浅田 洋平

Yohei Asada

水利環境工学研究室 2018年博士課程進学

農学と工学の両方に興味があったので、工学寄りの知識を使って、農業が抱える問題を解決することもできるのではないかと、この道に進みました。研究室では、農業に使う水に関係した、いろいろなことを研究しています。僕が取り組んでいるのは、農業用水のパイプラインにおける漏水の検知。高度成長期に数多くつくられたパイプラインが老朽化し、頻繁に漏水が起きています。目視や異音で検知してきましたが、精度が悪く、手間もかかるので、水圧の変化などで自動的に検知できるシステムを考えています。農業用水については、海外にもさまざまな課題があるようなので、将来的には、そんなことにも貢献できたらと思っています。

襲田 絢香

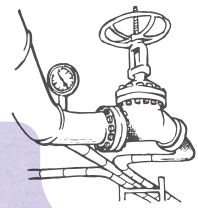
Ayaka Osoda

生物環境情報工学研究室
2017年修士課程進学

リモートセンシングという技術があります。人工衛星や航空機に搭載したセンサーを用いて、地表の状態を調べる技術で、農業や漁業、資源調査、防災、環境保全など、幅広い分野での利用が期待されています。いま私が取り組んでいるのは、地球観測衛星ランドサットから提供されるデータを、さまざまな角度から解析して、農作物の生育状態の監視や、災害時の損害評価などに役立てる研究です。日本では農業人口が減少し、憂慮されることも増えているので、新しい切り口を提案することによって、解決に貢献できるのではないのでしょうか。農学部には、この分野で第一人者とされる先生もおられるし、すぐれた研究成果が自由に利用できるもので、どこよりも研究環境に恵まれているのではないかと思います。

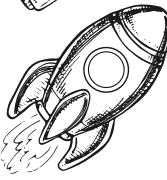
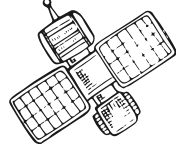


工学寄りの
知識で農業に
貢献したい



どんな環境で
植物は
よく育つのか

わからないことを
探り探りやる面白さ



Q なぜ生物・環境工学を選んだの？

Why have you chosen the Department of Biological and Environmental Engineering?



宇宙から
作物を監視する
時代に



すぐれた
研究成果が
身近に



川島 崇志

Takashi Kawashima

生物環境工学研究室 2018年修士課程進学

中学・高校生の頃は、飛行機やロケットに興味があり、工学方面に進もうか考えていました。でも、そういう世界には何万人もの研究者や技術者が集まっていて、「もっと良いものを」「それよりすごいものを」と究極の結果を求めている。そんなところに自分のできることが残っているだろうかと思いました。その点、農業にはやられてないことがいっぱいあります。いま研究しているのは、農作物が生育する環境を、エンジニアリングで最適に制御すること。ところが、何が最適なのかさっぱりわかりません。トマトに聞いても何も答えてくれない。わからないから、探り探りやっていくところが面白いんです。農学部は、やりたいことを探していけば、いくらでもやりようが見つかる素晴らしい学部です。



詳しくは、東京大学 大学院農学生命科学研究科 生物・環境工学専攻
<http://www.en.a.u-tokyo.ac.jp/>

IN THE SOCIETY

卒業生人名録 04

日本の農村全体を良くしたい
飯館村復興の先を見据えながら

農林水産省 九州農政局 佐藤 聡太

農学を学ばれたのはなぜですか。

飯館村の環境が大好きで、高齢化や過疎化が進む村を救える人になりたいと、ずっと思っていました。そして、飯館村のような農村の地域づくりは農学部の農村計画学という分野で学べることを知り、進学を決めました。進学の直前に東日本大震災に伴う原発事故が発生し、飯館村は全村避難になりました。大学卒業後はすぐに村に戻るつもりでしたが、飯館村の再生に取り組んでいる溝口勝教授と出会い、村に貢献するにはもっと農業について学ぶ必要があると感じました。

大学院では飯館村復興のPR活動もされました。

大学院等の友人と共に「までいラボ」と「いいはな」の2つのプロジェクトに組みました。前者は飯館村における畜産のイメージアップを目的に、飯館牛の血統を引き継ぐまでい牛を弥生物産展、五月祭、村の記念祭で販売しました。後者は「花咲く飯館村」をコンセプトに、飯館村の形をした花壇を作り、多くの花々を植えました。これらの活動を通じ、農家さんの村に対する想いや考えは我々が授業で学んだことよりもはるかに上にあることを実感しました。他にも多くのことを学ばせていただいた飯館村の農家さん、大学院や他大学等の関係者の方にはいまでも感謝の気持ちでいっぱいです。



PROFILE

佐藤 聡太 Sota Sato 1992年福島県生まれ。2015年宇都宮大学卒業。2017年東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了。同年農林水産省入省。2015年に同院学生・飯館村民らと協力し、飯館村における畜産のイメージ向上を目的に学園祭や村民祭等にてPR活動を行った。2016年には多くのボランティアとも協力し、「花咲く飯館村」をコンセプトに村の形をした飯館花壇を作成。現在は様々な地域を巡り、これからの飯館村や日本農村の在り方を模索している。



現在は農水省で働かれています。

飯館村を農村活性化の成功事例として広め、日本の農村を良くしたい。しかし、飯館村のような地域がひとつの村として目指すべきゴールはどこにあるのか。この解決策を見出すには様々な農村と関わり、地域としての在り方を学んでいくが必要だと考えました。そのため、現場の声を直接聞き、課題やニーズを感じながら日本の農村の政策を考えられる、これまでの経験を活かせる農水省が一番だと判断しました。

今後、飯館村とはどのように関わっていこうと考えていますか。

村の課題のひとつにイノシシ被害があります。施設のフェンスが破られたり、実家の田畑や庭も荒らされていました。野生鳥獣を駆除する猟友会も高齢化が進んでいるため、被害の深刻化が考えられます。ジビエブームにも関わらず、飯館村のイノシシは被爆しているため食べられません。それなら、革製

